

1 富山の特徴から

富山といわれたら、何が特徴かと聞かれたら、即座に「山と自然と水と森林と米」であると答える。「山と水と森林」のうち何といつても第一は「山」である。

山は、富山地域の境界を形成し、時には台風の行く手を遮る。それだけ山の存在は大きい。山があることにより、冬場は降雪が激しく、これが豊富な水資源となり、森林を育み、農業を生業させる。そして、山は、天候が良いときには澄みきった空を背景に雄大な姿をみせ、山をバックにして昇る朝日には宗教的意味が生まれ、いつしか山には畏敬の念がうまれてくる。こうして、山が精神的なバックボーンになっていく。

我ら富山人にとては、山を見ながら生活し、建物を建てるときにも山の眺望が前提となっている。県外の人が「富山はなぜすぐ立山か」を不思議がっているが、山好きな人は「とにかく立山が第一」ともいってくれる。そんな立山について語りたい。

2. 立山のいわれから

越中の立山は駿河の富士山と加賀の白山とともに日本の三名山であり、富山ではシンボル的存在として有形無形に(農耕や宗教など)我らの生活の営みに大きく関わっている。それは何といっても立山のスケールの大きな山容に根ざす畏敬の念によるものであり、また立山が(富山平野の東側に)大きく聳え立つ屏風による独特の気候(夏の多湿、冬の豪雪)が野や山に実りをもたらしているためともいえる。

ともあれ、こうした山への関わりが山の名称に凝縮され、山としてかつ連峰としての雄大な広がりがその名の由来となっている。すなわち、「屏風のようにびえ立つので立山となった」といわれている。ただし、立山の特徴には荒々しさや力強さもあり、立山の名称に「ノコギリのようになっているとして太刀山が立山となる」といった説もまた大いにうなづける。

ところで、現代では立山は、雄山(3003m)、大汝山(3015)、富士の折立(2998)の三山の総称としている。もっとも平安期にはいわゆる立山連峰(毛勝三山から薬師岳まで)を総称していたが、時代が下るとともに、立山三山を立山というようになった。

そんな立山も、地元の人でさえ立山連邦を見て「立山はこの山」というように特定出来る人は山の好きな人を除いてほとんどいない。これは山を知らないということではなく、立山とはとにかく屏風のような山全体でとらえているあらわである。また、平地からは剣岳はよく見えるものの立山三山は西側にある大日岳に隠れて見えないこともあり、その分、剣や大日岳などが鮮明に印象深く見られ、総体としての連峰が立山そのものという捉え方がされるようになってきた。とはいえ、立山は連邦として、三山として、いくつもの表情をもつ山といった方が適切であるといえる。

なお立山連峰は北から南の順に次のように並ぶ。

毛勝三山(2414)、剣岳(2999)、別山(2874)、真砂岳(2860)、富士の折立(2998)、

大汝山(3015)、雄山(3003)、竜王岳(2872)、

鬼岳(2750)、獅子岳(2714)、ザラ峠(2348)、

鷲岳(2617)、五色が原、薬師岳(2926)

このほか、中山(1255)、大辻山(1361)、鍬崎山(2090)

という脇役的な山もある

3 立山の歴史から

山については、歴史的に初期のころは山の壯厳さが尊われていたが、平安末期以降の末法思想とあいまって宗教的因素が強くなり、宗教の布教の場として山が位置付けられていった。

特に立山の場合には靈験あらたかな高さがあり、これが山の靈という神秘さに拍車をかけた。また頂上の室堂平付近(地獄谷地区)には、いくつもの墳氣孔があり、さながら地獄の様相を呈しているので、極楽と地獄が組となっていることにより直ちに宗教的環境が整い、立山がそうした山岳宗教の場となった。この点が白山や富士山の場合と異なっている。

そしてまた、立山頂上には富士の折立とか白山神社系統のものまであり、さながら日本三名山、三宗教を一同に集めたことになっている。立山に大日とか浄土といったように仏教にちなんで山が命名されているのも、山岳宗教のなせる業である。

4. 立山の名が知れわたり

修驗者の布教により、立山信仰が全国に広まっていた。布教に際してはマンダラと称される絵巻が活用され、これには

- ・立山の開山の歴史、
- ・立山の極楽と地獄、
- ・布橋の話(立山山麓にある橋。生前悪いことをした人は橋から落ちるとされている)

がまとめあげられて描かれている。ちなみに、富山の薬の究極の起源は修驗者の持参薬にあったという。

5. そして立山のいま

そうした立山も現代文明の荒波に洗われ開発され、1970年の立山黒部アルペンルート開通によりそれまで20万人であった観光客が100万人となり今日に到っている。当然、室堂平の荒廃や、高原バス路線沿いのブナ林立ち枯れなどの被害が目だっている。それでもマイカー乗入禁止の効果で、山の自然が破局にいたっていないことは幸いである。マイカー規制を勝ち取った自然保护団体の努力に敬意を表したい。

ともあれ、立山は現代文明の時代には大衆化されるに到った。こうした現象は自然とむきあう観光のなせる業ではあるが、立山は文字通り観光資源として我らの生活圏に何の気負いも無くさりげなく組み込まれている。ただし忘れてならないことは、立山への畏敬の念はやはり富山人の心の中の片隅に今でも宿っていることだけは確かである。

写真 2005



P1 富山平野中央呉羽山からの展望



P4 雄山山頂



称名滝(写真中央右)

P2 大辻山からの立山
(立山の西側にある山、山の南麓には立山駅あり)



P5 黒部平からみる立山
(写真中央若干左下にある黒い穴が大観峰駅)



P3 室堂よりみる立山三山



P6 同上、夏場 立山アルペンルートHPから引用